



ニッポン
ドクター和の

臨終区巻

この夏、信州に旅行に行かれる人は、できたら上田市にある「無言館」まで足を延ばしてほしい。深緑生い茂る静寂の中、教会のようにはびっそりたたずむ美術館です。ここにはゴッホやピカソのような有名画家の絵はありません。画家や彫刻家を夢みながら先の戦争で徴兵にとられ若くして命を落とした戦没画学生作品だけを展示している慰霊美術館なのです。

「必ず生きて帰ってくるから」と約束しながら美しい婚約者の姿を描いた人。家族が談笑しながら食卓を囲む風景を描いた人。彼らはどんな思いで、出兵前夜に絵筆をとったのか。これらの作品の前では誰もが無言になる。だから「無言館」と名付けたと、館主で美術評論家の窪島誠一郎さんは言います。

この窪島さんとともに「無言館」の設立に尽力したのが、戦後

312 洋画家 野見山 暁治

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

の美術史を牽引(けんいん)した洋画家で東京芸術大学名誉教授の野見山暁治さん。6月22日、福岡市の病院で亡くなりました。享年102。死因は心不全との発表です。風邪のような症状があったため、6月8日に入院されたとのことですが、それまではずっとお元



気で絵を描いていたとのこと。見事な大往生です。

野見山さんは1920年、福岡県飯塚市生まれ。東京美術学校(現・東京芸術大学)に入学し油絵を学んでいましたが、43年に繰り上げ卒業。ただちに応招されてソ連国境に近い満州へ。ここで死ぬのだと覚悟をしましたが、戦地で肺を患ったため、内地送還され入院生活を送ります。終戦は病院で迎えたそうです。その後回復のち渡仏し、本格的に画家の道を歩み、一躍有名になりました。しかしいつも心にあったのは、

自分と同じように戦争に赴き、志半ばに死んだ画学生たちのこと。死者の犠牲の上に、己の安逸な生活がある……野見山さんにはいつも、生き残ったことへの後ろめたさが付き纏いました。そんな想いから、戦没画家生作品収集を始め、窪島さんと出逢い、「無言館」創立へとつながったのです。野見山さんが百寿を迎えた2年前、世の中はコロナの真っ最中。朝日新聞のインタビューで、こんなことを話されています。

「今はやっぱり絵が描きたい。死にたくない。コロナに殺されたら今までのために生きてきたんだと怖がっています」

奇跡的に助かった命であったからこそ、戦死した仲間分まで生き、彼らの作品を世に残すことに命をかけた人生。ご自身も、多くの作品を描き続けました。

戦争、災害、疫病……百年生きるということは、多くの危機を免れたという点でもあります。野見山さんは、「生き残った者には、必ずその使命がある」と身をもって教えてくれたように思います。

生き残った者の使命伝える